
Biohazard Japan

アルフォートV 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B i o h a z a r d J a p a n

【Nコード】

N 0 8 8 3 G

【作者名】

アルフォートV2

【あらすじ】

アメリカの大企業会社アンブレラ、その会社が生み出したウィルスが日本の首都東京にばらまかれた、さらにそのウィルスは一度吸ってしまった人間をある”魔物”に変えてしまうという恐ろしい物だった。魔物の繁殖力は凄まじく、どんどん魔物で溢れかえっていく日本。そんななか東京に居ながらもある出来事をきっかけに正常だった三人の少年たちがいた。彼らは魔物の巣窟と化した日本からどう生き残るのか…

ブローグ ZERO（前書き）

処女作なので誤字脱字やおかしい所や見にくい所などいっぱいある
と思いますが暖かい目で見てくださいね（、、）
では始まり始まり

プロローグ ZERO

キンコンカーンコン

「ついに…ついに夏休みだー!!」

学校のチャイムが鳴った瞬間、髪が黒色でショートヘアーの少年は椅子から勢いよく立ち、両手をグーにして腕の上にあげ、叫んだ少年の名前は霧島^{きりしま} 夜一^{よいち}この物語の主人公である

「学校も終わったし、さっさと帰って遊ぶかね」

夜一はそう言つて、スクールバックを右手で持ち、教室の一番左下のドアを開け廊下に出た

「さて、家着いたら何すっかな」

と、にやけながらブツブツ言っていたら、後ろからこっちに走ってくる音がした、夜一は気になり後ろを向いた

「おー!」

夜一は誰だか分かり、手を軽く上にあげ、『よっ!』と言った

「はあはあ、お前行くの早えよ、いくら今日から夏休みだからってちよっとくらい待ってくれたっていいだろ」

「わりいわりい、早く帰リたかったからよ、それより拓摩、今日遊べるか?」

夜一は軽く笑いながら、答えた

ちなみに今、夜一に走ってきた少年は、髪は薄い茶色でセミロング、夜一とは同級生で家も近い白山^{しらやま} 拓摩^{たくま}だった

「今日？OKだぜ」

拓摩は軽く手をグーにして答えた

「そりゃよかった、じゃあ俺ん家集合で、他にも誰か呼ぶ？」

「じゃあ信と瀬戸は？」

「ああ、じゃあその二人呼ぶか、拓摩は信呼んどいて、俺は瀬戸呼ぶから」

「わかった」

今日の予定を話した後、二人は分かれ道で分かれ、それぞれの家に帰っていった

プロローグ ZERO2 (前書き)

ここまでは平凡な感じですが(=ω=)b

ブログ ZERO2

「よし、クリア」

夜一は学校から帰った後、部屋にあるベッドの上でゲームをやっていた

「さて、次のステージは…」

チャラリラリン♪チャラリラリン♪

ゲームを進めようとしたら、夜一の携帯のメール着信音が鳴った

「お、来たか」

夜一はそう言って携帯を開いた

メールの内容

「着いた」

返信内容

「わかった、あ…瀬戸呼ぶの忘れた（^^;」

夜一は拓摩に返事を返したあと、瀬戸にメールをし、家を出た

「よお、信」

「夜一、瀬戸呼ぶの忘れてんじゃねえよ」

「はは、わりいわりい」

信という少年は、冗談混じりで言った、それを夜一は軽く笑いながら謝った

さつきから名前が出ている信という少年は、夜一の同級生で、髪は金髪、前髪は普通くらいだが後ろ髪がけっこう長い、喧嘩が強く、よく不良と間違われることが多いが実際はそうではなく、喧嘩が強いのは家系から受け継がれてるから、金髪なのはカッコいいから、本人的にはそれだけ

「さて、これからどうすつか？」

拓摩が割って入るように喋った

「とりあえず瀬戸来るまで俺ん家で遊んでようぜ」

夜一は家の玄関のドアを開け言った

二人とも『じゃあそうするか』と言って夜一の家の中に入っていった
ちなみに瀬戸と言うのは夜一の同級生で、黒髪でストレート、いつも眼鏡をかけている

「お邪魔します」

「邪魔しやす」

拓摩と信が順番に言った

夜一の家は玄関から入って、正面の左が夜一の部屋がある二回への階段で、右が普段ご飯を食べる時やTVを見るときに使う部屋や風呂がある廊下である

三人は左の階段をのぼっていった

ガチャ

先頭にいた夜一がドアを開け、部屋に入った
それに続いて二人も部屋に入った

「相変わらず汚いな」

拓摩が頬をかきながら言った

「片付けんのダルいから放置してる」

夜一はそう言つてベッドに寝つ転がりゲームをやり始めた、夜一の部屋は、辺りが本やゲームカセットなどで埋まっており立ってるのがやつとのくらいだった

「仕方ない片付けるか」

信が拓摩を見ながら言った

「…そうだな」

拓摩はそう言つて部屋を片付け始めた
それに続いて信も片付け始めた

「おい、何のんきにゲーム何てやってんだ、お前も片付ける」

信が夜一に言った

「あともうちよつとだから待ってく…あ!」

夜一が喋ってる途中にちょうどコンセントが刺してある所にいた拓摩がゲームのコンセントを抜いた

「あ、ゴメン」

拓摩はニヤニヤしながら謝った

「そんな…あともう少しでクリアだったのに…」

夜一はそう言っただけで、かなりショックだったのか、その後一言も喋らず掃除をした
しばらくして、掃除も終わり三人で格闘ゲームを楽しんでいた時だった

「またお前の勝ちかよ…」

拓摩は下を向きながら言った

「やっぱ夜一はゲーム強いわ」

信は後ろにゴロンと寝っ転がり言った

「ふ、悪いね君たち、また勝ってしまったようだ」

夜一は上機嫌で二人の肩をポンと叩きながら言った、すると拓摩がゲームカセットの入ってるケースをあさり始め夜一たちの方を向いて言った

「…なあ、他のゲームやんね？」

「俺は別にいいよ、夜一は？」

「ん？ああ、良いけど3人で出来るゲーム今やってたのしかないよ、あるとしても2人対戦しかない」

夜一はゲーム機からカセットを取り出しながら言った

「じゃあ代わり番こでやる？」

拓摩がケースをあさりながら言った

「それじゃ待つてる人が暇じゃん」

「格闘何だから勝負何てすぐつくだろ」

夜一が拓摩に反論した後すぐ信が言った

「くっ…」

何も言えなくなった夜一は黙って言うことを聞いた

「よし、じゃあやる…」

ピンポン

拓摩がゲームカセットをゲーム機にセットしながら言おうとした瞬間に家のインターホンが鳴った

「瀬戸かな、あいつやっと来やがった」

そう信が言つと、夜一が『あいつ随分遅かったな』と小声で呟きな
がら玄関に歩いて行つた

ブローグ ZERO3

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン！！

インターホンは必要以上に鳴った

「ふちっ…うつせえな」今から行くから待ってる！」

夜一は、余りにしつこかったのでキレ気味に言った
二階にいる二人も不思議に思っていた

「瀬戸ってこんなイタズラするような奴だったっけ？」

ピコピコ

信は格闘ゲームをやりながら対戦相手の拓摩に言った

「いや、あいつはけっこう物静かな性格だから自分からこういつ」とは滅多にしないはずだけどな…」

ピコピコ

「…だよな」

ピコピコ

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン！

インターホンはまだ鳴っていた

「うるせえ！！」

バン！

ついにキレた夜一はドアを思いっきり開けた

「！？」

夜一はてつきり瀬戸がやったのだと思っていた、しかし、ドアの外に立っていたのは瀬戸ではなかった、黒いコートを全身に着て、黒いフードと仮面で顔を隠した男？だった
さらに背中には包帯で巻かれている”何か”を背負っていた

「初メマシテ、夜一サン」

「！？…なぜ俺の名前を知ってんだ！」

夜一は自然と汗が出た

「ソレハノチノチ機会ガアレバ分カリマスヨ……サテ、本題に移リ
マシヨウカ」

男はそう言つと、背中に背負っていた”何か”を床に置いた
夜一はそれを見た瞬間何故か寒気がした、何故寒気がしたか、それ
はおそらくこの包帯が…

ヒトノカタチダッタカラ

ブローグ ZERO 4

「これは…何が入ってた？」

夜一はかなり嫌な予感がした

男は夜一が焦っている様子を見てニヤツとして言った

「コレハ…包帯ヲホドケバ分カリマスよ」

男はそう言っただけで包帯をほどき始めた

夜一は心の準備をした、この”何か”がもし予想している最悪な物だったら…

夜一は両手をグーにして構えていた

一方二階では

ピコピコ

「なあ、何か様子が変わじゃね？」

疑問に思った信が拓摩に言った

「確かに、何で早く二階に上がってこないんだ」

ピコピコ

「丁度このゲームも飽きてきたし、見に行くか」

信はそう言って立ち上がった

拓摩も『そうだな』と言って立ち上がった、が

「拓摩ちよつと待った、あと一回勝負してから行かない？」

「何故？」

「いや、さすがに21勝21敗で終わらすわけにはいかないだろ」

「それもそうだな、じゃあこれが最終決戦だ」

「よっしゃ！最後は俺が勝つぜ！」

「いや、俺だ」

二人の最終決戦が始まった

「う…あ…」

一階では包帯をほどき終わっていた
包帯の中身は夜一の予想通りと言えば予想通りだったが、普通の死体じゃなかった

髪の毛は焼かれ、左目はくり抜かれたかのように強引に取れていて、
右目は飛び出していた

さらに全身は皮膚が溶けていて、内蔵がよく見えるくらい
そんな物を見せられた夜一は自分の意思では動けと言っている、
体は動かなかった

「ズイブン動揺シテイラッシャイマスね、安心シテ下サイ、アナタ
”達”ヲコウスルタメニ来たわけじゃありません」

「じゃあ何しに来たんだよ」

夜一がそう言う、男は死体を指差して言った

「伝エニデスヨ」

「俺達がこの死体のようになるのか!？」

夜一は構えた

「違イマスヨ、モウスグ東京ニイルスベテノ人間がコウナルトイウ
コトです」

男が言った後、死体が動き始めた

「なっ!？」

夜一は後退りした

「驚イテルヨウでスネ、ソレモ無理ハナイ、目ノ前デ死体ガ動イテルのニ驚カナイ方ガオカシイ」

ドカ！

そう言つて男は動く死体？の頭を蹴り飛ばした

「！！」

「トリアエズまだアナタ達ニ死ンデモラウワケニハイカナイノで今回ハ私ガ排除シマシタ」

男は右ポケットに入っているハンカチで黒いコートについた返り血を拭いた

「今のは…何なんだ…俺には死体のようには見えただが…」

夜一は余りにショッキングな出来事に、頭が真っ白だった

「死体ト言エバ死体デス、シカシ、見テ分かツタ通りタダノ死体デハアリマセン、アレハ”ゾンビ”デス」

「ゾンビだと！？」

話飛び過ぎていて訳が分からなくなる夜一

「正確ニ言エバアメリカノ大企業会社アンブレラガ作ツタウイルス

ヲ吸ッテアアナッテシマッタ、人肉ヲ主食トスル人デス」

「なんだと？」

夜一には訳が分からなかった

「一体どういうことだちゃんと説明しろ」

「最初カラソノツモリでス、ココニ来タノハソノタメデスカラ」

男はそう言つと、返り血を吹いていたハンカチをポケットに戻し、話始めた

プロローグ ZERO 5

「マズ、アンブレラ社ニツイテ、アンブレラ社ト言ウノハアメリカノ会社デ、アメリカデハ知ラナイ人ハホトンドイナイ、イタトシテも大体の人ハ聞イタコトはアルクライノデカイ会社デス

ソノ会社が昔カラ企業秘密トシテ研究シテイタノガコのウイルス、通称「ウイルス」、コノウイルスは最初ハ死者ヲ蘇ラセル薬トシテ研究サレテイマシタ、ソコデマズ、死者ヲ蘇ラセルにハ細胞ヲ生き返ラセレバイインジャナイか、ソウ考エタアンブレラ社ガ、研究ニ研究ヲ重ネツイニ細胞ヲ蘇ラセル薬ヲ開発シタ、ガ…ソレハ失敗ダッタ、マズ実験用ノネズミデ試シテミタガ、一応生き返ッタガ、理性ガキカナイタメ凶暴化シテシマッタノデス、シカシ、コレダケデハマダワカラナト判断シタアンブレラ社ガ次ハ死人ニ試ソウトシタ、ダガ結局ヤラナクッタ、何故ナラ「ウイルスハ感染力ガ高いノデ、モシコレガ失敗シテアメリカ全土ニ広がッタラ大変ナコトナル、ソウ思ッタアンブレラ社ガ、次に目ヲツケテイタのハ日本ダッタ、日本ハ大陸トシテ孤立シテイルシ、モシ他国ニ感染ガ及ンダトシテモ恐ラク日本カラ一番近い朝鮮ナドガ感染スルダケ、キツとアメリカマデハ感染ハ及バナイダロウ、ソウ考エタカラダ」

男は喋り終わつた後『フウ』とため息をついた

「ちよつと待て、そのウイルスはまだ死人に試したことないんだろ？じゃあ何でアンタは死人もそのウイルスに感染すれば凶暴化するって分かつてんだよ」

夜一は腕組みをしながら男に問いた
すると男は、ニヤツと笑つて言つた

「フツ…面白い所ヲツイテキマスネ…」

そう言つて男が質問に答えようとした直後二階から誰かが降りてくる音がした

「夜一、いくら何でも遅すぎだろ、何やつて…!？」

降りてきたのは信だった、余りに遅いので呼びに来たのだろうしかし、そこには瀬戸がいるはずの所に、見覚えのない黒いコートの男が立っていた

「こ、こいつは？」

信は夜一の方を見て言った

「話せば長くなる、とりあえず拓摩を読んできてくれないか？」

それを聞いた信は、『お、おう』と言つて二階に上がつていった

「さて、俺の質問に答えてくれよ」

「…ワカリマシタ」

そう言つて男は下を向いて少し黙つた後夜一の方を向いて話始めた

プロローグ ZERO 6

「実八私、１ツ言ッテナイコトガアリマス、ソレハ、実ハＴウィルスを開発シタ時、アンブレラ社ノ内部ニハ他社ノスパイがイテ、ソノスパイガＴウィルスを持つテイツテシマッタのデス、ソシテアンブレラ社ガ企業秘密デヤツテイタコトガバレ、アンブレラニ対スル世間ノ評価ハ一氣ニ落ちマシタ、コノ状況ヲ奪還スベク、アンブレラハＴウィルスヲ持つテイツタ会社ニスパイヲ送り、シバラクシタ後アンブレラハついに動イタ…送り込んだスパイが会社ノ配管工ニＴウィルス入りのケースヲ投げテ割り、会社全体ヲ感染サセタノデス、当然そノ会社ハ潰れ、そノ後、会社ノ外ニモ感染が広まり、アル街ガソノ日だケデゾンビの巣窟となツタノデス、ソシテ、アンブレラはソノ街を核爆弾で破壊し、世間にコウ発表シタノデス『確かに私たちがＴウィルスを作りました、が、しかし、私たちはそれをあくまでも使おうとは思っていなかった、そう、本当に悪いのは*会社です！*会社は、Ｔウィルスを悪用しました、現にラクーンシティを死の街に変えたのは*会社です！我々はこれからまたこんなことが起こらないようＴウィルスは除去します、これからも国民の役に立てるよう最前の努力をするつもりです、最後に、死んでいったラクーンシティ市民のご冥福を心からお祈りしています…』とね、一見うワベだケダト思われタ発表だが、何故か世間ノ心をトラエタラシク、アンブレラの信用は昔と同じ、いやもっと高くナツテイタ…だから私は結果が分カルワケです」

言い終わった後、男はまた『フウ』とため息をついた

「だからってなんで…」

「日本を狙うんだよ」

「！」

夜一が言おうとした続きを階段の近くにいた誰かが言った

夜一は反射的に階段の方を見る

そこには拓摩と信が立っていた

「途中から話は聞かせて貰った、質問に答えな」

信が男に言った

「ソレハサツキ言っタハズで…」

「いや、あんたがさっき言った日本を狙う理由だと、今言ったのと噛み合わない、Ｔウィルス人間にやるとどうなるかを試すために日本にＴウィルスをばらまくんだろ？でももうわかったじゃないか、なのに何で日本にばらまく？」

男が言おうとしたことに夜一が反論する、男はしばらく黙りこんだ

「何とか言ったらどうだ」

拓摩が追い討ちをかけるように言った

「フフ…ハッハッハッハ！！」

「????」

すると男は笑い始めた

三人とも何故笑っているか分からなかった

「アンブレラ社を世界の大企業会社にスルタメダヨ！」

男の口調が変わった

「野郎、本性を表しやがった」

信が戦闘体制に入る

それに続いて夜一と拓摩も戦闘体制に入る

「なるほど、世間はTウィルスをアンブレラは排除したと思っている、だが日本でTウィルスを充満させて日本がまたTウィルスを作ったと言うことにしてそれをアンブレラが排除すれば世界的に有名になる…そう言うことか」

構えながら夜一は言った

「ソウイウコトダ！」

「でも、何でそれを俺達に？」

疑問に思った拓摩が言った

「何デカッて？ソレハ遊ぶタメサ、よウハゲームサ、今カラゾンビの巣窟トナるコノ日本デ、お前達が生き残れるカドウカのな！」

「ゲームだと…？ふざけんな！」

信は男に殴りかかったが、避けられ、右足で腹を蹴られた

「グフッ！」

「下手に齒向かうトお前らの大事な友人が痛い目に会っゾ、いい力」

「！！ まさか、瀬戸！？」

夜一は大声で言う

「ソウダ、ソノ瀬戸とカイウ奴ハ我々アンブレラが誘拐シタ、返シテ欲シカッタら生き残ッテ見セロ！ジャアナ」

「ま、待て！」

夜一は必死に呼び止めたが男は去っていった

「くそ！何だってんだよ！」

拓摩は壁を叩いて言った

「とりあえず東京から出よう」

夜一は信に肩を貸して言った

拓摩も信に肩を貸しながら『そうだな』と言った

プロローグ ZERO7

「とりあえず駅に向かおう、東京から出ないと話にならない」

夜一はそう言って歩き始めた

「待て待て、二人ともサイフちゃんと持ってるか？」

二人で信に肩を貸していたので、急に動いた夜一に拓摩は急いで合わせながら言った

「俺は大丈夫、二人は？」

夜一が聞くと、拓摩は軽く親指を立てて合図し、信はうなずいた

「よし、じゃあ行くか」

夜一はそう言つと、信を座らせ、車の鍵で車を開け、後ろの席に信を乗せ、前の席に拓摩を乗せた

「さっさと行くなら車だろ」

「そうだな」

夜一がニツとして言ってきたのを拓摩は前を向きながら答えた

しばらくして、東京駅に着いた三人（信は向かってる途中で回復した）はキップを買って電車に乗った

「さて、こっからが本番だな」

夜一は外を見ながら言った

それを拓摩は同じく外を見ながら『ああ…』と答えた

「武器持ってきた方が良かったんじゃないか？」

信は不安そうに言った

「別にまだ何も起こっちゃいないさ、だからついた先で買っても遅くはないだろ」

拓摩は信の顔を見て軽く微笑みながら言った

「……だと良いけどな」

信はそう言った後、小声で『ちょっと睡眠とろ…』と言って目をつぶった…

「序章はこれでおわりさ…ここからが地獄の始まりだよ…ククク…」
薄暗い路地裏で壁に寄っ掛かって腕を組んでいる黒いフードを被った男は下を向きながらニヤツと笑って言った、そしてその後、歩いて暗闇の中へと消えていった…

遭遇

三人が乗った電車は神奈川行きだった、駅についた後三人は昼食を取るためにマクドナルドに向かいハンバーガーとポテトを食べていた

「うめえな」

信はポテトを食べながら言った

「なあ、東京だけに落とされるんだよな」

拓摩は机の上に両肘をのせ、左右の手を交差させてその上に顎をのせながら言った

「そつだよ」

夜一は背もたれに深く寄つ掛かりながら言った

「じゃあ、今の内に飛行機乗って逃げれば良くない？」

「！ そつだ！そうすりゃ良いじゃないか」

夜一は勢いよく立ち上がった

拓摩も夜一を指差して『だろ？』と言って立ち上がった
信は…まだ食べていた…

信が食べ終わった後、三人は飛行場に向かって一本道の道を歩いて
いた、左右は店や商店街が並んでいたのだが、何故か人の気配はま
ったく感じられなかった

「何で1人もいないんだ」

夜一は道路を歩きながら二人に聞いた

「さあ、何でだろうな」

両手をポケットに入れている信が、辺りをキョロキョロしながら言
った

「もしかしたらもう東京にTウィルスがばらまかれて、それがテレ
ビで放送されて皆逃げたのかもな」

そう言った後、拓摩は横目でチラッと右の店を見た

「誰もいないってわけじゃないかもな」

二人とも『え?』と言って拓摩を見た後、拓摩が見てる方向を向いた
そこには確かに人が動いていた

「何だ、いるじゃん」

信はそう言って店まで歩いて行った

「まて信、もしあいつがゾンビだったらどうすんだ」

夜一は信の肩を掴みながら言った

「その時はその時だ、ぶっ倒す！てかまだＴウィルスはここまで感染してないだろ」

信は夜一を見ながら軽くうなずき言った、夜一は『わかった、だが気を付けろよ』そう言って手を離れた

「おい、あんた、何でここら辺、人いないか知ってます？」

信はポケットに手を入れている状態で聞いた

しかし、応答がない

「おい！そのオッサン！あんたに聞いてんだよ」

信がそう言うと、オッサン？は信に気付いたのか、近ずいてきたそして、ある程度近くまできた

「なあ、質問に答えてくれ、何でここら辺、人いねえの？」

応答がない

信は『おい』と言って肩を叩こうとした、その時

「あゝあゝー！」

「!？」

オッサン？は普通じゃない声を出し、信に噛みつかうとしてきた油断していた信は何とか噛まれはしなかったがそのまま倒れ、オッサン？に馬乗りにされた
しかし、その反動で信に隙が出来てしまった

「しまっ…！」

ガブ

信は左肩を噛まれた

「ぐわー！」

信の痛みを叫ぶ声が路上に響いた

「まずい、行くぞ夜ー！」

そう言つて拓摩は信の方向に走つていった
それに続いて夜ーも『おう』と言つて走つていった

「ちくしょう、どけこの糞ゾンビ！」

信は痛みを耐えながら必死に噛まれまいと抵抗していた、が

ブシュ

さっき噛まれた所の傷が開き、血が飛びでた

突然の痛みに信は力が抜ける、その瞬間、ゾンビは今度は喉を噛もうとしてきた

「やべ…俺終わった…」

信は目をつぶって呟いた

ブ
シ
ュ

別れ（前書き）

言い忘れてましたがプロローグ ZERO〇ZERO7のラクーン
シテイがゾンビだらけになった理由とかは大体この小説に合わせる
ために自分がねじったものなのでゲームとか映画とは違ふところも
かなりあります、それが嫌な人はごめんなさい ゲームや映画
を見た人は分かってるかもしれませんが一応報告です、長々とすい
ません では、始まり始まり

別れ

「ぐは…」

信はゾンビに喉を噛まれそうになった瞬間、全ての力を振り絞り体を右に動かし、わざと右肩を噛ませて致命傷を避けた
そして

ドゴ！

信が噛まれた直後、拓摩がゾンビを信から引き離し、横から思いつきり夜一がパンチを食らわした

「へ、どうだ！」

夜一は右手の親指で鼻をピン！として言った

「信、大丈夫か！？」

拓摩は信に肩を貸してやった

「く…そ…いきなりピン…チになっち…まった…すまねえ」

「気にすんな！それとあんまり喋るな！余計な気力使っちゃまうと後々大変だぞ」

拓摩はそう言ってゾンビから離れた

「一旦にげよう！」

夜一がそう言うと、拓摩は信をおんぶし、今来た道を走って戻っていった、夜一も後を追うようにして戻っていった…

「あゝあゝー」

しばらくして、さっき夜一に殴られたゾンビは立ち上がって両腕を前に出し、夜一を追うように歩いて行った、その後も、その一本道の路地には、数人のゾンビが現れた…

しばらく走った三人は、ここで一旦休むことにした、信は建物に寄つ掛からせて、二人は信の横に座った

三人が休んだところから見るとここは、目の前が十字路になっていて、道路の端には店や市役所などが配置されている、ここもよく人がいるはずなのだが、やはり人の気配はなかった

「ふー、疲れたな」

夜一は空を見ながらいった、その後、二人はさっきのことについて話始めた

「そついえばさっきの…ありや明らかにゾンビだったよな？」

夜一は視点を空から拓摩に変えていった

「ああ、確かにあれはゾンビだった、だが何故この地域にゾンビがいるんだ？東京だけじゃなかったのか…」

拓摩は今来た道を見ながら言った

「もうこの地域にもウイルスが広まっちまったんじゃないか？」

夜一はため息をついた

「俺達は感染しなかったのか？」

顔は前を向きながら、目は夜一の方を向いてる状態で拓摩は言った

「…」

痛い所をつかれ夜一は黙りこんだ…

「う…あ…」

「！」

しばらく沈黙が続いた後、急に信が肩を押さえてうなり始めた

その瞬間、二人は信の方を向いた後、信に走っていった

「信！大丈夫か！？」

夜一が心配そうな顔で言う

「痛みが…また…」

信はそう言って深呼吸をし始めた

「応急手当が必要なな、完璧にはないが痛みは和らぐだろ」

拓摩は信の肩を見ながら言った

「じゃあ俺が病院から適当な物持ってくるよ」

夜一はそう言って立ち上がった

「一人は危険だぞ」

拓摩は少し心配そうな顔をして言った

「大丈夫、俺はこんな所で死ぬような奴じゃないさ」

「…わかった、だが必ず帰ってこいよ、それまで信は俺が守っとく」

夜一は軽くうなずいて、十字路に出た

「確か、ここを左に曲がって真っ直ぐ行くと病院があったよな」

夜一はそう呟いて、十字路を左に走っていった

しばらくして、拓摩はそれまで立っていたのだが、信の横に座った

「災難だったな、信」

拓摩は前を向きながら言った

「…ああ」

信は弱々しく答えた

「俺一人で数人のゾンビを相手にするのはきつい、最低でも武器は持っておかないと」…信

拓摩は信を呼んで立ち上がった

「…何だ？」

信は下を向きながら返事をする

「武器になる物さがしてくる、すぐ戻ってくるから待っていてくれ」

信は無言でうなずいた、それを見た拓摩は、一応まわりに敵がいなか確認し、近くのコンビニに入った

パリン！

自動ドアは開かなかったたので窓を割って入った

「何か武器になるもの、武器になるもの」

心の中でそう言いながら、拓摩はキョロキョロ探していた
しばらく探してもなかったのでコンビニを出た

「コンビニにはないか」すまん、信、もうちょっと遠くの店に行
つてく……!!」

しかし、そこには信は居なかった

「へまだそんなに動けるような体じゃなかったのに!!」信!!何処
だ!!」

拓摩は焦りながら辺りを見渡す、しかし、信は見当たらない

「くそ!何てバカなんだ俺は!」

ドン!

拓摩は建物を殴ってしばらく下を向いていた…

「…こうしてても拉致が開かない…探すか…」

そう言って拓摩は近くにある建物を順番に探そうと十字路に出た、が

「!」

さっきまで居なかった十数人のゾンビが十字路の右と左から来ていた

「さっきまで居なかったはずなのに!」

そう言い拓摩は十字路の南を行こうとしたが、まだ遠いがそこから
も十数人のゾンビがこっちに向かってきているのが見えた

「チッ！」

舌打ちをして拓摩は辺りを見た、『ここら辺の建物を調べるのは無理だ、一旦逃げよう』そう心の中で言って、唯一ゾンビがいない十字路の北に走っていった

ワゴン車の男

午後18:00

そろそろ暗くなってくる時間帯、病院を求めて十字路を左に曲がった夜一は、住宅街に来ていた

「病院探してんのに何で住宅街にきてんだろ…」

夜一はボリボリ頭を書いて歩いていた

「くっそー、こんな所歩いてる場合じゃないのに」

そんな愚痴をぶつぶつ喋りながらしばらく歩いていると、道路に出た

「お！やっと外に出たか、病院はあるかなー」

その道路も車はおろか人すらもいなかった、夜一は道路の真ん中を歩き、辺りを見ながら病院を探していた

「おっかしいなー、こちら辺にあつたはずなんだけどなー」

しばらくそんな調子で歩いてると、前から一匹ゾンビが歩いてきた

「そっついやゾンビいるんだっけ、真正面から来るなんてバカだな」

そう言つて、ゾンビに走っていき右ストレートを食らわした

ドゴッ！

バタ

「よ…弱いな…」

夜一が鼻をボリボリかいてると、ゾンビはすぐ立ち上がった

「お？」

「あゝあゝー」

立ち上がった瞬間ゾンビは夜一に噛みつこうとしてきたが、夜一は右に避け、右足でゾンビをこけさせるように足を蹴った

バタン！

ゾンビは倒れた、そこをすかさず夜一はかかと落としを食らわせた

グシャ

「うえっ！？」

かかと落としをされ、ゾンビの頭はグチャグチャになってしまった

「へき、気持ちわり、吐きそうゝ思ったより余裕だったな、他の部位殴ったり蹴ったりしても大丈夫なのに頭蹴ったらあっさり死んじまった…もしかして頭が弱点なのかな…」

腕を組んで頭がグチャグチャなゾンビを見ながら考えていた
しばらくして

「あつ！こんなことしてる場合じゃない！病院病院」

夜一はやつと気付き、また病院を探しに道路を歩き始めた

「中々見つからないな」

10分かけて道路から、左右には森林がある道路にまで歩いた夜一、だが病院は見つからなかった

「こんなに時間かかってたらやつぱ拓摩に起こられそだな、てかこんな所に病院なんてあるはずねえよ」

夜一はため息をついて今来た道に振り返った

「一旦戻るか…」

とぼとぼ歩いていると後ろから車が来る音がした

「え!？」

夜一は後ろを振り向く

ブーン

そこには確かに黒いワゴン車がこっちに走ってきていた

「乗ってる人がゾンビ何てオチはないよな…」

夜一は一応警戒したが、回り道をちゃんと曲がっていたし、運転もしっかりしているのが見えた

「良かった、あれは人だ！まさか俺達以外にまだ人がいたなんて」

もうこの地域はゾンビしかいないと思っていた夜一には嬉しい誤算だった

そしてワゴン車は夜一の目の前まで来てとまった

「おいボウス、こんな所で何してんだ」

車に乗っていた中年の男性は助席のドアを開け、下半身は運転席に置いて上半身を助席にのりだし言った

「病院を探していたらこんな所まで来てしまったんです」

夜一は後ろの頭を押さえながら言った

「病院？じゃあ途中まで乗せてってやろうか？」

中年の男性はタバコの火を灰皿に捨て言った

「あ、いや、道を教えてくれるだけでいいんで」

「そうか？じゃあまずこの道を真っ直ぐ行ってみな、看板があるからその看板の書いてある通りに行ったらちよつと汚くて日通りも余り良くないが病院があるぜ」

中年の男性はそう言って運転席に運転をする体制に戻った

「ありがとうございます」

夜一は軽くお辞儀をした

「おう、じゃあ俺は行くから、気を付けてな」

中年の男性はそう言ってエンジンをかけ、ワゴン車を走らせていった

「いい人だったなー」

そう言って夜一は真っ直ぐ歩き始めた

「ふっ、バカだなあいつ」

中年の男性はそう呟くと車を止めて外に出た

「もうこんな顔をしてる必要はないな」

中年の男性はそう言うと、右頬の下を触り、顔を剥がし始めた
ビリビリビリビリ

剥がし終わった後、男性は黒いコートと黒いフードを着た

「…誘導成功、コレデアイツハ死んだも同然ダナ、何故なラアノ病院にハ…」

「看板発見！」

夜一はしばらく歩いてついに看板を見つけた
看板が刺さってる所には分かれ道があった

「さて、どっちに行けばいいのかな」

看板にはこう書かれていた

ここを右、崖注意

ここを左、**病院

「右は崖か、危ねえ、よし、左に行けばいいんだな」

夜一は左に歩いて行った

〓5分後〓

「お！病院見つけ！」

夜一の目の前には市立病院より少し小さく、外見は何本か草が生えていたりツルが生えていたりのもう使われてなさそうな病院が現れた

「ちょっとじゃなくかなり汚い病院だな…まあいいか、さつき全くゾンビ出て来なかったからここら辺はきっとウィルスが感染してないんだな、よし！ちゃっちゃっと思急手当出来るような物持ってる」

か
」

夜一はそう言っ
て病院に入っ
ていった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0883g/>

Biohazard Japan

2010年10月11日04時05分発行